

北陸特有の環境条件に即した野菜安定生産技術の開発

1 中核機関・研究総括者

(独) 農業・食品産業技術総合研究機構

中央農業総合研究センター 片山 勝之

2 研究期間

2006～2008 年度（3 年間）

3 研究目的

稲作への依存度の高い北陸地域では、水田農業構造改革の下で効率的かつ安定的な水田作経営の育成が緊急の課題である。管内では、売れる米作りと共に野菜作振興を重視し、野菜の導入・拡大により水田作経営の複合化を促進し、経営基盤の強化と地域農業の担い手の育成・確保することが重要である。このため、冬季の多雪・寡照や重粘土壌等北陸特有の環境条件を克服した野菜の安定生産技術を開発する。

4 研究内容及び実施体制

- ① 北陸の環境条件に即した水田転換畑における露地野菜栽培技術の開発（(独) 中央農業総合研究センター、新潟大学、新潟県農業総合研究所、富山県農業技術センター、石川県農業総合研究センター）

前年秋季畝造成や被覆資材を利用した早春期の野菜の安定生産技術及び業務用野菜の省力・規模拡大化技術を開発する。

- ② 北陸特有の気象・資源に即した野菜栽培技術の開発（新潟県農業総合研究所、石川県農業総合研究センター）

早期秋冷を利用した果実の肥大促進と籾殻等を用いた養液循環栽培によるイチゴ「越後姫」の早期出荷作型を開発する。

- ③ 水田複合経営を踏まえた野菜作技術の経営評価と体系化（(独) 中央農業総合研究センター、新潟県農業総合研究所、富山県農業技術センター、石川県農業総合研究センター、）

新技術の体系化と経営評価を行い、マニュアルを作成する。

5 目標とする成果

初夏どり野菜の安定生産、作型の 1～2 週間前進、業務用野菜の作業時間の 6.5～15%削減、イチゴ「越後姫」の 3ヶ月前進出荷が確立される。これらにより、「水稻＋野菜」による複合経営化が促進・定着し、管内での地産地消の促進及び野菜の自給率向上に資することが期待される。

北陸特有の環境条件に即した野菜安定生産技術の開発

背景、行政ニーズ、必要性

- ・稲作に依存度の高い北陸地域では、効率的で安定的な水田作経営の育成が喫緊の課題
- ・管内は売れる米作りと共に野菜作振興を重視
- ・野菜導入・拡大による水田作経営の複合化を促進し、経営基盤の強化と担い手の育成・確保が重要

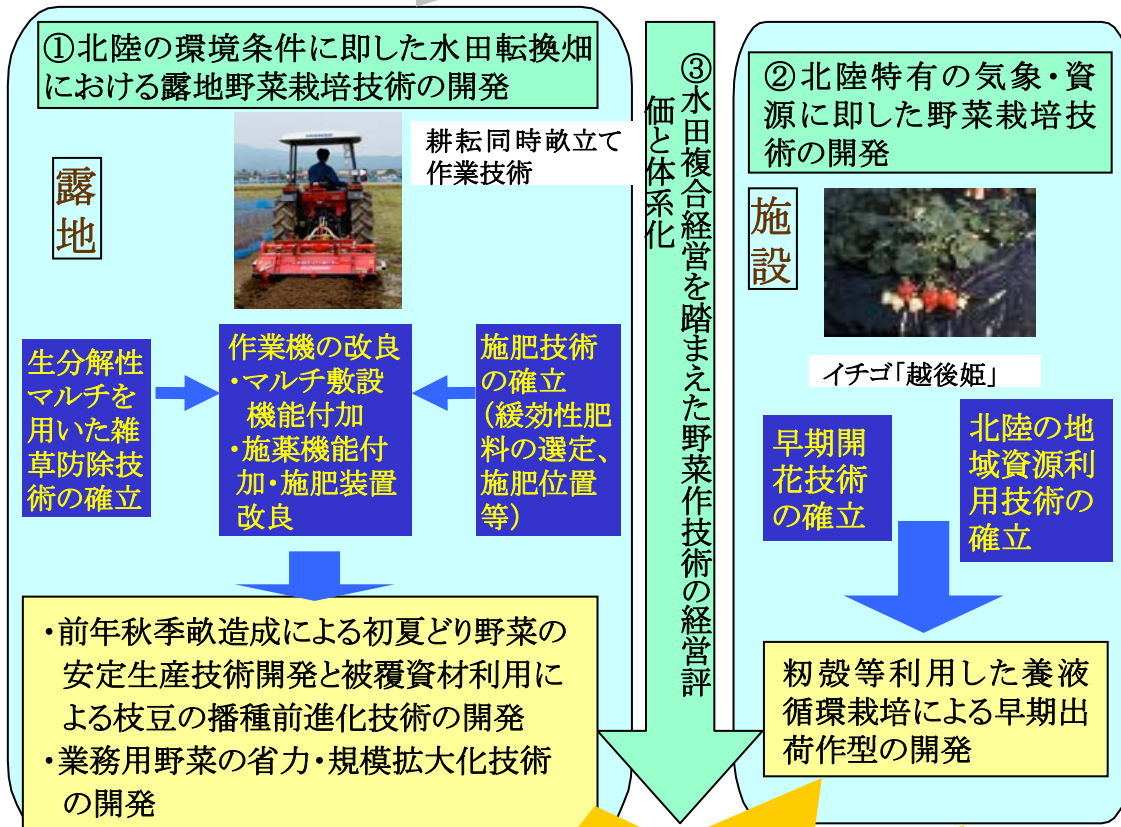
野菜生産の問題点は・・

- ・多雪、寡日照等で作期・作型が限定、しかも生産性が低い。
- ・重粘質土転換畑では、排水性や碎土性が低い。

既存の技術は・・

- ・ダイズ播種用耕耘同時畝立て技術の開発
- ・前年秋季畝造成技術
- ・寡日照対応イチゴ品種「越後姫」の育成など

研究内容は・・



達成目標は・・

- ・初夏どり野菜の安定生産
- ・作型の1～2週間前進
- ・業務用野菜の作業時間6.5～15%削減
- ・イチゴ「越後姫」の3ヶ月前進出荷

期待される波及効果は・・

- ・「水稻＋野菜」による経営複合化促進・定着
- ・北陸地域における地産地消の促進